

近世百姓の帯刀実態とその変遷

——山城国中の帯刀人改と「神事帯刀」を中心に——

尾 脇 秀 和

はじめに

近世社会には、百姓身分のままで帯刀する者が多く存在した^①。彼らは帯刀人と包括される存在の一種であり、山城国中では帯刀人改と呼ばれる、京都町奉行所による帯刀人の調査が行われていた。この帯刀人改については牢人対策、在地代官、兵農分離など、それぞれの関心に沿って論じた先行研究がある^②。筆者の場合は、近世「帯刀」の身分標識・身分格式としての機能への関心から、主に百姓・町人が時間的・空間的制約付きで帯刀する、非常帯刀に着目してこれを考察してきた^③。特に沓人兩名とも重なる京都町人の非常帯刀の実態を検討してきたが^④、本稿では、百姓身分のままで非常帯刀する状態に焦点を絞り、その実態と変遷を検討したい。

京都近郊における百姓の非常帯刀には、地頭用向帯刀・神事帯刀の二種類がある。前者は地頭（私領主）の用向のみ帯刀を許可されたもので多少の事例研究があるが^⑤、後者は村の神事祭礼でのみ帯刀するもので、従来帯刀人の先行研究において、主題として検討されたことがない。一七世紀末以降、帯刀は次第に支配側の許可を要する身分標識と化していったが、神事帯刀は地頭用向帯刀のように、元来支配側が許可したものではなく、身分標識化以前から存在した村の帯刀習俗であった^⑥。神事帯刀はどのような手続・認識によって成立し、帯刀人改においてどの

ように取り扱われたのか。また本人に限り（史料上「其身尠人」等と表現される）許可されることを原則とした百姓の非常帯刀は、どのように継承されたのか。政策による影響や代替りなどの時間的変遷を踏まえた具体的事例の分析により、その意味と実態を明らかにする必要がある。近世村落における百姓の帯刀人に着目することは、近世社会を身分格式の面から考察する上で、重要な視点になると考える。

本稿では以上の問題関心に基づき、京都近郊における百姓の帯刀実態を、その変遷を踏まえて明らかにする。特に山城国乙訓郡の村々を主な事例の対象地域とする。京都近郊といえるこの地域は、禁裏御料・幕府領・公家・寺社などの領主支配が錯綜している相給村落が一般的で、京都町奉行所下の四座雑色（方内）の一人である松村氏が触伝達を担当していた。そのため帯刀人改の際も、村は松村氏を通じて申告や手続を行っている。⁽⁸⁾

第一章 百姓帯刀に対する政策の経過

（１）幕令の動向

天和三年（一六八三）、幕令によつて町人の完全な帯刀禁止が明確に発せられた。⁽⁹⁾それは正徳期刊行の『和漢三才図会』に「天和二年、始有法式、武士挟大小二腰、農工商之輩可用短刀一腰」と記述され、あるいは、寛政七年（一七九五）の『本邦刀剣考』に「中古より農工商賈の類迄、皆刀を差て武士と姿替る事なし。天和二年御法令ありて、武士のほか二刀を差事を禁ぜらる」と記されたように、武士が「二腰」（大小二本の「帯刀」、庶民が「一腰」（脇差のみ）となった起点として、近世一般に認識された。近世社会を特徴づける特別な身分標識としての「帯刀」は、天和三年令が重要な画期をなして、次第に確立していったものである。

但し百姓の帯刀禁止を明言した幕令は、享保六年（一七二一）閏七月まで確認できない。それも「百姓之子共を始、諸親類之内、軽キ侍奉公ニ出し、其後在所江引込候而も、其俣刀差候族も有之由相聞候、自今以後、如此之類、

在所江帰居候ハ、先主より少々合力なと受候共、刀差候儀停止二候^⑪という、武家奉公から帰村した百姓が、引き続き帯刀する行為を禁じたものであった。この前年の享保五年一〇月、幕府は「帯刀」が特別な身分標識としての価値を高めつつあったことを背景として、百姓の孝行者や正直者に対し、褒賞として帯刀を許可することを規定した^⑫。しかし同六年六月、田舎から江戸に出てきて武家奉公をし、これを辞めた後も帯刀し続ける者たちが問題視された^⑬。このような者が村に帰ってからそのまま帯刀を続けた場合、帯刀の褒賞的価値が損なわれてしまう。先の同年閏七月令は、彼らが帰村した後の帯刀を禁じ、帯刀の価値を高める目的で出されたものであった^⑭。しかし百姓の帯刀禁止を明言した幕令がこれ以前に存在しないこともあり、後にはこの触書が「帯刀仕候者御制禁之儀ニ付御書付」という呼称で『公事方御定書』にも収録されている^⑮。

その後、勘定奉行が代官向けに出した通達では、寛延元年（一七四八）、幕府領における「百姓町人苗字名乗、帯刀いたし候儀」は、格別の理由がなければ許可されないと述べており、安永二年（一七七三）には「苗字帯刀御免之もの」の年貢納入時の名前の記載方法について指示している。寛政二年（一七九九）には、「其方共支配所^{（代官）}内往古より帯刀」している者などは格別の理由がなければ許されない^⑯ので、私領が幕府領となる際には、吟味して勘定奉行へ伺い出るよう指示している。庶民の帯刀は、支配側の許可なしには許されない身分格式だという認識が、次第に自明のこととして定着していったのである。

更に享和元年（一八〇一）七月、幕府は全国向けの触書を以て、領主が他領他支配の百姓・町人に対して、苗字帯刀を許可することを禁止した^⑰。この前月、評定所では京都代官小堀縫殿の支配所である山城・大和・丹波の幕府領の百姓に対し、公家や寺院が「立入」として、苗字帯刀許可を与えていたことが問題となつて評議されていた^⑱。これは私領主による苗字帯刀許可が、あくまで自領民を対象とした「領分限り」であるにもかかわらず、支配違いの他領民にかかる免許を与える事態を、幕府が支配の秩序を乱す行為として問題視したものであった。但し評定所

は、現実に処罰することは困難と判断して、「御触被置、自然と相止」のを「穏ニ」待つべきだとして、現状は問題化しない限り穿鑿しないことに決した。その上で発したのが右の触書であり、実際には他領他支配の者に対する帯刀許可も、依然として存在したことも窺える。⁽²⁰⁾

(2) 元禄四年末の調査と同五年令

元禄四年(一六九一)、京都では天和三年令に背き、無届で「刀を指、徘徊」している存在が問題視され始めた。⁽²¹⁾

表1 元禄4年12月井ノ内村の帯刀人

	帯刀名目	名前	申告された帯刀実態
1	菊亭殿御下侍百姓	勘兵衛	御本所方御用之時ハ、刀を指罷出、御用相勤申候、私用之時ハ一切指不申候
2	〃	与介	
3	〃	久兵衛	
4	〃	茂介	
5	〃	佐衛門	
6	〃	庄左衛門	
7	四条殿御下侍百姓	長兵衛	
8	〃	次良衛門	
9	〃	久衛門	
10	〃	伝衛門	
11	〃	喜衛門	
12	中山殿御下侍百姓	仁兵衛	四条殿御家来故、打(折)々各(格)別之御用被仰付候ニ付、御扶持方を被下候、就夫御用之節ハ刀を指罷出、御用中相勤申候
13	〃	又兵衛	
14	〃	六衛門	
15	鷹司殿御下侍百姓	吉兵衛	
16	〃	作左衛門	
17	〃	七衛門	
18	〃	勘衛門	
19	四条殿御家来	石田太兵衛	

出典：元禄4年12月「刀指申者御改ニ付一札之事」(石田政房家文書)
 註：5の「佐衛門」以下、「衛門」(右衛門)の表記はママ。同村領主は今出川(菊亭)・四条・中山・鷹司・伏原の五家だが、この時は伏原家の下に侍百姓はいない。元禄13年には「伏原殿御下(「侍」脱カ)百姓」3名が加わっているほか、四条殿家来石田太兵衛が消え、その後継の瀬兵衛が「侍百姓」の一人として書き上げられている。(元禄13年正月「刀指申者御改ニ付一札之事」〈同上文書〉)。

京都町奉行所は、まず町々に対して、町に居住する「奉公人」(「誰殿御家来」と「浪人」の届け出を同年八月に命じ、一月には寺社方・浪人・儒医・検校の「召仕之若党ニ刀ヲ帶シ、主人別宅ニテ町家・在家ニ住居之分」をその主人より提出せしめた。⁽²³⁾そして一二月、今度は町続や村々に対して、「町人百性ニテモ刀ヲ帶シ申候者」の調査を命じた。⁽²⁴⁾それは①「由緒」があり、刀を常に(「常々」)帯びる者か、②常には刀を帯びない(「常々ハ刀差不申」)者か、更にその②がa「地頭主人用事之時分」のみの帯刀か、b「祭礼等」でのみの帯刀か、委細に書き出すように指示し

ている。これが「百姓」を対象に含めた、京都町奉行所による帯刀人調査の初例である。

同月、これをうけた乙訓郡井ノ内村では、町奉行所宛に「刀指申者御改三付一札之事」を提出している。⁽²⁵⁾ 同村は村高三〇〇石余、五人の公家領主による相給で、うち四領主に「侍百姓」と称する一八名がいた(表1)。彼らは「御本所方御用之時ハ、刀を指罷出、御用相勤申候、私用之時ハ一切指不申候」と届け出られている(前述の②、aに該当)。他に「四条殿御家来」の石田太兵衛がいたが、彼は村に住む公家家来として届けられており、この時点では「百姓」ではないことになっている。なお同月、同郡築山村は、同村菱妻大明神の宮年寄である徳左衛門ほか四人について「祭礼之節斗刀指申候」と届け出ており、②bの帯刀人も、実際に申告されたことが確認できる。⁽²⁶⁾

この調査を経た元禄五年二月、京都町奉行所は百姓・町人の帯刀のあり方を規定した触書を発する。⁽²⁷⁾ このうち百姓の帯刀に関する条項をまとめよう。①神事帯刀は従来通り許容する(「百姓にて其村神事之節、従前々刀帶來ものハ不苦、然とも猥不可刀帶事」)。②地頭から自領民の百姓への帯刀許可は、町奉行所への申請なしで構わない。

但し「私用」で帯刀しないようにせよ(「地頭用事申付、其領村之百姓刀帶儀、斷無之共不苦、然とも私用に刀帶儀者停止之事」)。③村役人が常帯刀することは禁止する(「地頭より庄屋など申付置候百姓、主人有之由にて平常刀帶もの有之候、向後可為無用」)。つまり地頭が任命する「庄屋など」の村役人は、「家来」ではなく「百姓」であるから、常帯刀は許さないとの規定である(地頭用向帯刀は可)。④百姓のうち地侍の帯刀は、由緒とそれを保証する請合(多くは寺院)を立て、町奉行所に届け出ること(「地侍にて先祖より刀帶來候者ハ、其由緒承届候上、是又請合を立、刀帶可申事」)。この地侍は「郷侍」・「郷士」などともいい、京都町奉行所の規定では「地侍と申、先祖より刀帶來候百姓」(傍点引用者)であり、その身分と、それに伴う帯刀は「其身尠人」、つまり本人限定である。郷侍は「常」に帯刀できる格式だが庄屋に就任すると③規定に抵触するため、庄屋在任中は郷侍としての帯刀を凍結されている。⁽²⁸⁾

元禄五年令は、百姓・町人（庶民、被治者）と「家来」（士分、治者）の身分を、「常」の帯刀か否かによって、峻別することが目的であった。故に町奉行所に届出が必要とされた百姓身分の帯刀は、格式としては常帯刀である郷士のみであり、非常帯刀である地頭用向帯刀と神事帯刀は、町奉行所への申告なしで可とされた。元禄五年令の細則では、「百姓ニ而も神事祭礼之節、又者地頭之用事ニ而、一日限之帯刀之儀者不苦候」と明記されており、その性質上「一日限」であるが故に、「常」の帯刀との混交は生じないから、右の目的の阻害要素とはみなされなかった。地頭用向帯刀は地頭による領民への許可であるから、元来町奉行所の容喙すべき問題ではない。また神事帯刀は、村の慣行・習俗であつて領主支配とも関係がない。町奉行所はこれらを把握する必要性を、当時においては認めなかったのである。

但し②において、百姓の「私用」帯刀禁止を厳命している点は見過ごせない。その付則では「右百姓之内、年頭・八朔・五節句・式日等刀帯候儀、私用に候間無用之事」という、「私用」の範囲も明記している。それはハレの場で帯刀習俗が、なお村に存在していたことをも示唆しているよう。町奉行所は帯刀を身分標識とする意識に基づき、身分標識ではない、村の慣行・習俗としての百姓の帯刀に規制を及ぼし始めている。尤も地頭用向帯刀が、最初から支配側の許可に拠るものであったのに対し、神事帯刀は支配側の許可に拠らない、「従前々」の習慣、つまり村の百姓たちの裁量に委ねられ続けた。神事帯刀と地頭用向帯刀は同じ非常帯刀でも、その由来が異なる。しかるに支配側による帯刀の許可という行為、つまり帯刀の身分標識化は、神事帯刀に対する意識にも次第に変化を齎していくのである。

（3）享保六年令・元文二年令

元禄一三年にも同様の帯刀人改が山城国中を対象に行われたようだが、その後、次の享保六年一〇月の帯刀人改⁽³³⁾

において、大きな方針転換が行われた。³⁴⁾

堂^①上方武家方家来、且亦郷侍^②二而刀帶候者、并常百姓^③二而其所之神事、或者地頭用事之節刀帶候者、此度相改、村切に書付、其村之庄屋^④一人持參可申候事

附、右帶刀之者向後増減之儀、断可申来事

一、寺社方帶刀之家来、前々^⑤書付指出候茂有之候得共、猶又此度増減相改候而書出可申候事

右之趣書付相認、来ル十一月十五日迄、^{（京都町奉行・調訪頼篤）}肥後守役所江持參候様、山城国中在々并洛中洛外之寺社方江可相触

者也

丑十月

ここで想定されている村に存在する帶刀人とは、①家来、②郷侍、③百姓の神事帶刀、④百姓の地頭用向帶刀で、種類自体はそれ以前と変わらない。重要な点は、無届で許されていた③・④を含む「帶刀之者」について、今後はその「増減」を申告するように命じている点である。この方針転換は、第一章で述べた享保五年以降の帶刀の褒賞利用による身分標識化の進行も背景にある。

井ノ内村は、享保六年二月、「乍恐奉申上帶刀御改之事」を町奉行所に提出した。³⁵⁾まず家来と郷侍は、村に「從往古^⑥一人も無御座候」と明言した上で、「当村家数七拾四軒、内式拾貳軒、從往古侍分二て御座候」と述べる。

但しこれは、鷹司家領の庄屋が提出したものであるため、名前は同家領の百姓五名（元禄四年申告の四名に、庄屋市左衛門を加えたもの）のみを書き上げている。そして「右御本所様侍役之御用被仰付候得節、五人之物、^{（者）}刀帶申事御座候」と地頭用向帶刀であると従来通り申告した上で、更に「当村神事、毎年正月九日二的射御座候、此時其年之從当人、侍式人仕立申候、則五人之侍分之物、^{（者）}刀帶申事御座候」と記している。この「的射」とは、同村「地藏院仲間」（地藏院は同村内の寺院）の「矢射講」が正月九日に、当屋の二人が奉射を行って、邪を払う年中行事

表2 享保6年鹿ヶ谷村の帯刀人

	地頭	名前	申告された帯刀内容
1	妙法院門跡	谷口織部	①「郷侍」で「常帯刀」
2	〃	〃 忠兵衛	
3	〃	〃 庄兵衛	
4	〃	〃 庄右衛門	
5	〃	寺崎三郎兵衛	②「代々郷侍」だが「御在所御用」と「村々神事等」で帯刀する。「常は帯刀不仕候」
6	富小路家	〃 甚右衛門	
7	〃	〃 勘右衛門	
8	〃	〃 善右衛門	
9	妙法院門跡	武右衛門	③「御在所御用」と「村々神事等」で帯刀する。「常は帯刀不仕候」
10	〃	弥三右衛門	
11	〃	太右衛門	
12	富小路家	又兵衛	④「村々神事ニ帯刀」する。「常は帯刀不仕候」
13	〃	伝右衛門	

出典：京都市編『史料 京都の歴史 8 左京区』（平凡社、1985年）185～186頁。同村は、妙法院門跡・青蓮院門跡・富小路家の相給である。「御在所」は「御本所」の誤りか。

のことである。³⁶つまり侍百姓が地頭用向帯刀と神事帯刀とを兼ねていることを記している。申告人数に関係しないためか、元禄四年時には記述のなかった情報である。また同月、乙訓郡長峯村は「百姓 城戸平左衛門、畑儀左衛門」の二人について、「往古より当村氏神之神事祭礼、地頭の御用等ニ帯刀仕来候」と届け出ている。³⁷この二家は、村の寄合で上座につく特別な村の旧家であった。³⁸百姓の帯刀人は、村の旧家・庄屋筋の百姓であるため、地頭からは庄屋として地頭用向帯刀の許可を受け、村からは旧家として祭礼での神事帯刀を認められるため、両方の帯刀理由を持つことが多い。

しかしそのように単純でない村もある。同年一月一日、愛宕郡鹿谷村では、表2のように同村帯刀人を申告している。³⁹同村には、①郷侍で常帯刀、②郷侍だが地頭用向と神事でのみ帯刀する者、③地頭用向と神事のみでの帯刀、④神事のみでの帯刀、の四種類があった。なお②は郷侍だが、村役人への就任によって郷侍の資格を凍結された上で、地頭用向・神事帯刀を許された存在である。行政上、村役人である②・③は同格だが、郷侍として苗字を称する①・②と、苗字なしの③・④との間には、村内の家格においては明確な序列の一線がある。⁴⁰同村では地頭の任命する村役人―平百姓という行政上の秩序と、郷侍―その他百姓という旧来の村内秩序とが絡み合って、四種類の帯刀人分類を生み出していた。

なお長峯村の城戸・畑氏の場合、地頭用向と神事で帯刀する村の旧家であるが、その後の帯刀願の手続きにおいても、専ら自らを「百姓」と称して肩書にもしており、「郷侍」と称した例は近世を通じて一度もな

い。また井ノ内村の侍百姓は全員が苗字なしで、人数も地頭の数を超過しており、村役人Ⅱ侍百姓（非常帯刀）という構図は成り立たない⁽⁴⁾。百姓の帯刀には各村内の秩序が作用しており、支配側の帯刀人分類だけでは序列化できない。しかし帯刀人改は、帯刀という共通の指標を通じて、百姓の格式を顕在化し、支配側に認知されるという結果を生じさせたのである。

なお同年一二月、領主側にも知行所の帯刀人調査が命じられている。葛野郡西院村に五石の知行を持つ地下官人である山口少外記の場合、享保六年一二月一二日、外記方地下官人を管轄する押小路大外記（局務）から、次のような領地の帯刀改が命じられた⁽⁴⁾。

自局務、以使部触状持参

①、領知之内、家来にて致帯刀候者之事

④、地頭用事時斗帯刀被申付候者之事

①、領知ニ他所之家来、致帯刀住居候者之事

②、領知ニ郷士其外前々より致帯刀申者之事

右之品、委細書付可被差出、右之品、知行所ニ無之候ハ、無之段書付可被差出候、無相違様ニ可被吟味候、

已上

右の番号は、調査が命じられた帯刀人の種類を、享保六年令の触書①④と対応させたものである。①は家来が自身の家来（a）か、他の家来（b）かを区別して書くようになっていいる。③は神事帯刀については、何も記されていない。領主が許可するものではないため、当然領主に対しては、調査対象とはされなかったことがわかる。

山口少外記は「私知行所西院村百姓之内」には「帯刀之者無之候」と翌日書面で大外記に届け出ているが、知行所内に帯刀人が存在した事例もある。乙訓郡調子村に知行所を有した地下官人（御隨身）の調子筑後守の場合、一

二月三日、武家伝奏宛に帯刀人改書を提出している。⁽⁴³⁾これによると、同氏の知行所には「私方用事御座候節帯刀」する庄屋築山又九郎、百姓友岡庄兵衛、同山本六郎兵衛の三人と、浪人一名（「永井信濃守殿浪人安達瀬兵衛 悴安達権之丞」）の存在が申告されている。

その後、元文二年（一七三七）四月、享保六年令と同趣旨の触書が出された。⁽⁴⁴⁾在方における一斉の帯刀人改としては享保六年に次ぐものである。触書では享保六年令の下線部①④の部分に「禁裏御所方御内并宮御門跡堂上方家来、楽人、地下役人、且又武家方家来、儒者、浪人、医師、郷者、⁽⁴⁵⁾又者常百姓ニ而其処之神事、或ハ地頭用向之節、惣而帯刀之もの」と置き換えられ、帯刀人の種類が細分化されているが、百姓の帯刀については全く同じで、調査方針の変更は認められない。

（4）寛政一〇年の厳密化

その後、寛延三年（一七五〇）以降、京都の町方では帯刀人の品替り・代替りにおける申告を命じる町触が度々出されている。⁽⁴⁶⁾これらは自己申告を原則としたため、次第に正確な帯刀人情報の把握に支障が生じたことがわかる。町方の帯刀人改は町代、⁽⁴⁶⁾在方における帯刀人改は四座雑色が担当したが、いずれも不定期に行われた。在方は広範圏に及ぶためか、各雑色は単年で管轄地域（「持場」）全ての村を一斉に実施していたわけではないようで、乙訓郡今里村は安永二年四月、同郡石見上里村では同九年五月と、帯刀人改の時期が同郡内でも異なっていることが確認できる。⁽⁴⁷⁾しかし寛政一〇年に行われた帯刀人改は、元文二年以来となる山城国中を対象とした一斉調査で、かつ享保六年に次ぐ画期となった。⁽⁴⁸⁾これを具体的にみていきたい。

石見上里村では、これに先立つ寛政九年九月、帯刀人改が雑色松村氏より命じられた。その際同村は、①「常帯刀」の正親町三条家家来大島数馬、②「地頭用非常之節帯刀并神事帯刀」の斎藤藤左衛門（惣代庄屋）、③「神事

帶刀」の神明座頭年寄仁右衛門を帶刀人として届け出た。⁽⁴⁹⁾③は座の二〇軒のうち、年長者による持ち回りである。村は「享保六年十一月九日御改」時の文面に沿って書いたという。その翌年三月一六日、村庄屋は京都町奉行所より帶刀人改書の提出を命じられて出向いた。その時の様子が、同村大島家の「日記」三月一六日条に、次のように見える。⁽⁵⁰⁾

今日午刻、庄役武辺方召れ、帶刀御改有之候、則去秋書付相改、方内迄差出申候通、又々写シ候而、庄役持參被致候、於役所御尋候趣ハ、代替之節、嗣目相願不申候而ハ相済かたく候、又いつの比ハ御家来ニ成、帶刀致候哉、被尋候処、書付之通、年久敷儀ニ候ヘハ、過行候儀ハ相分り兼候、夫ハ焼失も有之、又不案内ニ而其儘ニ相成候哉、彼是分り兼候得共、享保年中御願申上候写所持仕候、天明ニも御届申上候様ニ御答候所、元文年中御帳面ニ留り候儀可申出様、被仰出候所、元文ハ焼失候哉、日記之中分兼候趣答申候、又常帶刀之外、地頭御用帶刀ニ而も、急度相届可申、浪人帶刀、郷士帶刀ハ勿論たるへき事、地頭御用帶刀ハ、一日ニ而も百日ニ而も、いつニ而も御家来ニ相違なき事、又雇ひと申セハ、其日一日限り之事故、雇ひ人抔と同様ニ心得候事無之候様被申渡候、又神役帶刀も、已来ハ相届可申候由なり、武辺ニ於而、帶刀之仁御存なくてハ済不申候、此後得と相しらへ、今一応可申出旨也、答ニ、何分不案内、且ハ焼失等ニ而分り兼候間、廿五日迄御日延願入と申、退出なり、且又外々ニ而も、小堀へ申込候計ニ而帶刀いたし候方ハ、御取上ケニ相成候方、二三軒も有之候由也、何分此度ハ厳密ニ御改、新に御帳面ニ留り申候事ニ存候

即ち京都町奉行所は、帶刀人はこれまで代替りに手続をしていなければならないと述べた上で（後述の通り、多くの村がその届出を行っていなかった）、①常帶刀（家来等）・②地頭御用帶刀・③浪人帶刀・④郷士帶刀・⑤神役帶刀という種類を挙げて、今回はその全ての申告が必要であることを強調している。特に②地頭御用帶刀は、出勤こそ時々の一日限にせよ、領主から「御用」を命じられる関係が継続する以上、その都度人宿などから、その日限

りで不特定に雇用される若党などの「雇ひ人」(帯刀人としての申告の必要なし)⁽⁵¹⁾とは違うと述べ、その申告の必要性を強調している。また⑤神役帯刀について「已来ハ相届可申候由なり」と記しているが、神事帯刀は享保六年以降申告対象となっていたから、石見上里村では従来申告の必要がないと誤認されていたことがうかがえる。なお町奉行所が「元文中御帳面」の情報に基づく申請を求めていることにも留意しておきたい(但し同村は、元文の記録を失っていたので参照できなかったとする)。この後、同村は二四日に京都町奉行所証文方に内々に相談した上で再提出し、大島と斎藤については「帳面ニ留り」(正式に帯刀人として登録完了)、残る神事帯刀も「神事帯刀之家廿軒之内、九軒して輪番神役帯刀」と願い出ることで、四月五日に何とか許可されたという。

石見上里村が町奉行所で「厳密」な帯刀人改について説明された三月十六日の翌日、雑色松村氏は乙訓郡勝竜寺村に、次のような触を出している。⁽⁵²⁾

其村々帯刀人改之節、当時無之旨、書付被差出候、右者郷士・浪人ニ不限、地頭用并神事之節帯刀之向も書出候事ニ候処、心得違不書出村方も有之由、弥村方ニ帯刀いたし候者無之哉、今一応相糺、書付早便ニ此方へ可差越、若又心得違、相洩有之書出候ハ、其誤相認メ、明十九日此方へ可差越候、以上

松村三郎左衛門

三月十七日

これは帯刀人を「当時無之」と回答した「村々」を対象に、一斉に出したものとみられる。松村は帯刀人改を郷士と浪人だけが対象と考える「心得違」を懸念して「地頭用并神事之節帯刀」も申告対象だと明言し、再度の調査提出を命じたのである。実はこの段階に至るまで、このような「心得違」によつて地頭用向・神事帯刀には相当多数の未申告者があつた。勝竜寺村久貝氏は、以前から地頭用向帯刀であつたのに、この再調査の指示を受けて初めて届け出ており(第三章)、今里村と調子村では、後継者が帯刀を続けているのに、代替りの際に手続を全く行っ

ておらず、地頭用向帯刀も、地頭の許可だけでよいと考え、町奉行所に届け出ていなかったのである（第二章）。

右の各村が一七日の松村の触をうけて町奉行所に提出した書面には、「是迄繼目品替等之節者御届可申上之処、全先役共之心得違御届不申上候段、於当役も奉恐入候」といった、代替りや品替りの未申告を詫げるほぼ同一の文言が含まれており、雑色などから、未申告があった場合の文言が例示されていた可能性が高い。いずれにせよ、町奉行所に把握されていない百姓の非常帯刀が、寛政一〇年まで相当罷り通っていたことを裏付けている。

なお大島氏は「厳密ニ御改」の理由を「新に御帳面」に記載するようだ、との推測を述べていた。帯刀人改の前身の一つである近世初期の牢人改においては、上・下京居住の牢人を記載した帳面が作成されていたことが知られるが、近世中・後期の帯刀人については不明である。いずれにせよ寛政一〇年における帯刀人改の「厳密」さは、従来未申告者が多数存在した百姓の非常帯刀（「地頭用并神事之節帯刀之向」）に重点を置きつつ、元文以来となる、あらゆる「帯刀之仁」の悉皆調査とその把握を企図したものであったことは明白である。なお石見上里村では「去秋」にも帯刀人改が行われていたこと、通例雑色が二年連続で同じ村の帯刀改を実施することはないことを踏まえれば、寛政九〜一〇年の帯刀人改が、従来雑色が不定期に行っていた「去秋」の調査とは、全く別の事情から実施されたことも明らかである。

その後、弘化二年（一八四五）四月、京都の町では、毎年九月の宗門改の際、同時に「帯刀人改帳」も町奉行所に作成・提出させることになり、以後は毎年町単位で作成・提出されたが、領主支配が錯綜している山城国の在方に対しては、従来通り帯刀人からの品替わりの申告と、雑色らによる不定期の調査が行われ続けた。

寛政以降の乙訓郡の村々では、享和二年〜三年、嘉永二〜三年に行われたことが確認できる。例えば今里村・勝竜寺村は、享和二年四月二六日、長峰村では同年五月とほぼ同時期だが、石見上里村では享和三年四〜五月にかけて行われている。嘉永期も、長峯村は嘉永二年一〇月、今里村は同三年四月、粟生村は同年六月である。

在方の調査にあたる四座雑色は、最小四六か村（荻野氏）～最大一六八か村（松尾氏）の「持場」を担当しており、松村氏の持場も九五か村である。⁽⁶¹⁾ 村数が多い上に、なおかつ広範囲でかなりの手間と時間を要する。村ごとに実施時期にはズレがみられるのは、単年での一斉調査は困難であったため、一～二年ないしそれ以上の期間を跨いで実施したためであろう。寛政時のような「厳密」な一斉調査は容易に行いうるものではなく、以後行われた形跡はない。⁽⁶²⁾

第二章 百姓帯刀の代替り―今里村の事例―

(1) 今里村の帯刀人

次に、乙訓郡今里村の事例から、百姓の帯刀がどのようにに変化・継承されたかをみたい。今里村は表3の通りの相給村落で、帯刀人は享保六年令による同七年の届け出以降の分が確認できる（表4）。

同村の小山宇右衛門は、享保七年正月には「花山院前大納言殿家頼」として、「帯刀」（御家来常帯刀）を京都町奉行所に届け出られて公認されていたが、⁽⁶³⁾ 同年三月、改めて「花山院殿用事之節、又者所之神事帯刀不苦候、此

表3 今里村領主内訳（元文3年）

領主	石高
	石 斗 升 合
蔵入地	60.
禁裏御料	50.
伏見宮	269. 495
大聖寺宮	58.
花山院家	105.
西園寺家	104.
大炊御門家	100.
松木（中御門）家	100.
万里小路家	90.
西洞院家	80.
葉室家	50.
転法輪（三条）家	50.
鷲尾家	9.
藤大納言御局	62.
上野御局	39. 505
合計	1227.

出典：元文3年「[今里村明細帳]」（『長岡京市史 資料編三』190頁）をもとに作成。

註：伏見宮は世襲親王家、大聖寺宮は比丘尼御所。御局料は禁裏女官に付与される知行であるため、その時の女官により名称は変わり、分割されて与えられている場合もあるが、領主構成は、明治初年まで変化がない（木村礎校訂『旧高旧領取調帳（近畿篇）』近藤出版社、1975年）30頁）。

外帯刀不成之旨」が町奉行所に公認されている。⁽⁶⁴⁾ この変化は、「庄屋役相勤居申候二付、常帯刀難成旨」を命じられ、「御地頭御用節・神事斗二帯刀」に変更されたものであった。⁽⁶⁵⁾ このほか享保七年正月付で「伏見殿御家来」として「帯刀」（常帯刀）を公認された能勢太右衛門がいたが、こちらも申年（享保

表 4 今里村の神事帯刀相統

	I	II	III	IV	V	VI
	享保7年(1722)	元文2年(1737)	安永2年(1773)	寛政10年(1798)	享和2年(1802)	嘉永3年(1850)
①	大聖寺宮御下庄や 四郎兵衛持新右衛門	西洞院殿百姓 平野新右衛門	西洞院殿御家領百姓 平野新右衛門家相統	西洞院殿御家領百姓 平野新右衛門家相統	西洞院殿百姓 平野巖右衛門	大聖寺宮御家領 平野巖右衛門右跡相統人
②	平野新右衛門	平野新右衛門	平野新右衛門	平野新右衛門	平野巖右衛門	平野巖右衛門
③	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
④	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑤	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑥	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑦	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑧	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑨	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人
⑩	葉室殿下庄や 小山平左衛門	葉室殿百姓 小山平左衛門	萬里小路殿御家領百姓 小山平左衛門跡改姓	萬里小路殿御家領百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿百姓 樋口八郎右衛門	萬里小路殿御家領 樋口八郎右衛門右跡相統人

注：前任者と名前が異なる場合はゴシック体太字にした。なお享保7年の能勢大右衛門は家来・常帯刀での申請、のち変更(本文参照)。
出典：I…享保七重年御願申上被名前「(能勢久嗣家文書)／II…元文2年6月10日「刀帯御改二付奉差上口上書」(小山堂治家文書)／III…安永2年5月26日「存恐口上書」(能勢久嗣家文書)／IV…寛政10年4月3日「存恐口上書」(今里区有文書)／V…享和2年4月26日「就御尋口上書」(今里区有文書)／VI…嘉永3年4月25日「奉願口上書」(樋口哲也家文書)

一三年カ）五月には「常帶刀ニ而罷有候処、向後右御用之節斗帶刀」するとの変更が町奉行所に公認されている。⁽⁶⁶⁾地頭が「庄屋」を「家来」と届け出て常帶刀を認めていた者（元禄五年の規定違反）について、修正の申告がなされていったことを窺わせよう。

享保七年に村が帶刀人として届け出たのは、表4のIの通りで、元文二年六月一〇日にも同じ一〇名が町奉行所に申告された（表4のII）。彼らは皆、「地頭用事之節、神事祭礼等斗帶刀仕、常ハ刀帶曾而不仕候」という百姓であつた。

（2）村内秩序と神事帶刀の継承

しかし安永二年（一七七三）五月二五日の京都町奉行所への届出では、帶刀人三人（表4のIIIの⑧、⑩）の名前がII元文時と別の名前に変わつていた。⁽⁶⁸⁾そのため町奉行所は「先年之名前ニ引合不申候ニ付、名前違之訳」を尋ねた。翌日、村は「先年之名前之もの共ハ死失仕、耆人も無御座候、此度御願申上候もの共ハ相果候もの共之悴又ハ親類共」であるが、名前の違う三人は、「（享保七年申告者の）相果候以後、代りとして惣兵衛・儀兵衛・伊右衛門共、神事之節祭礼之供奉」をしている者で、人数が増えたわけではなく、「村方一統得心之上」であるから許可してほしい、と述べている。⁽⁶⁹⁾この願いは同日に許可されたが、この願書控の末尾には、「覚書」として「此度之願ニ付、彦右衛門・治郎兵衛・勘右衛門、右三人得と相談仕、得心之上御願申上候、普明寺ニ而庄屋年寄中参会ニ而相済申候」とみえ、二六日の口上書には「彦右衛門・治郎兵衛・勘右衛門、此三人ハ神事帶刀之義御願可申旨相談在之候処、望無之旨、如何様ともいたし候様被申候ニ付、此度惣兵衛・義兵衛・伊右衛門此三人代りとして相願被申候」との書き入れがある。⁽⁷⁰⁾つまり実際には三人の子孫が神事帶刀を「望」まず、村内での「相談」の上で別の者が「代り」になつたものである。この三人は苗字なしの名前であるので、他の七人より家格が低く、世襲庄屋ではな

かったことが推測される。「代り」のうち野村伊右衛門は、元文二年六月一六日に「地頭大炊御門殿用事之節斗帯刀」⁽⁷³⁾することを町奉行所から公認を受けた新興の庄屋で、その後もこの神事帯刀を継承したが、儀兵衛と惣兵衛はこの時限りである。相給村落は、多数の庄屋の存在によって村内が纏まらない傾向にあるが、とりわけ今里村は、庄屋罷免要求を伴う村方騒動がかなり頻発した村であった。⁽⁷⁴⁾そのため旧家と新家の勢力交代も生じており、神事帯刀の継承には、その影響が顕著にみられるようになる。

IV寛政一〇年の帯刀人改では、樋口八郎右衛門をはじめ、前任者と全く別の名前の五名が帯刀人として届け出られた。⁽⁷⁵⁾彼らは前任者の「跡」の同姓の相続人が「改姓」^(姓)した者と称しているが、前任者と血縁者である事実はなく、全く別の百姓家である。これに先立つ寛政四年閏二月、今里村の百姓六〇人余は、庄屋七人が庄屋給米を増額するといった、惣百姓を困しめる「勝手」・「我儘」を行っていると、京都町奉行所に訴え出ている。⁽⁷⁷⁾同訴状によると、同村全体の百姓軒数は七〇軒余であり、この訴訟は惣百姓による庄屋層の糾弾であった。この時訴えられた庄屋七人とは、表4 IVの②・⑤・⑩で、⑦以外は全て新興の庄屋であった。とりわけ不正の「発頭」として強く糾弾された正木安兵衛と山田伊左衛門は、訴状の中で「五六年前以前庄屋役相勤、古き庄屋ニ而ハ無之、新庄屋ニ而御座候」と述べられている。この騒動は翌年内済となったが、寛政一〇年における帯刀人の大きな変化は、村役人層の浮沈・交代をも反映しているのである。神事帯刀は、特定の家が零落しても無条件に継承するものではなく、庄屋を勤める村の有力者となった人間が纏う、村内の格式であったことが証せられる。なおIV⑧・⑨の相続人は、直近のIII安永二年の情報ではなくII元文二年申告時の人名との関係において書き上げられている。これは前述のように、「元文中御帳面」との変化を把握しなかった町奉行所側の指示に従ったものであろう。

V享和二年には、⑥の山田伊左衛門が「山田伊左衛門跡相続 能勢孫兵衛」に代わり、山田伊左衛門が消えたが、VI嘉永三年には③嶋田孫兵衛の代わりに「山田伊左衛門名跡相続人 山田伊左衛門」として復活しており、⁽⁷⁹⁾もとの

山田伊左衛門の後相続をしたはずの能勢孫兵衛も、「能勢孫兵衛相続人」として続いている。寛政以降の「名跡相続」、「改性^(姓)」などという表明は、事実に基づくものではなく、町奉行所に対して帯刀の継承手続を行うための建前的な体裁に過ぎないものであった。

なお今里村の帯刀人は、当初地頭用向・神事の両方の帯刀であったが、寛政時、地頭用向帯刀は「先年御断」し、今は神事帯刀のみであると届出ており、享和二年にも、全員「神事之節帯刀」のみと申告している。嘉永三年には地頭用向帯刀の復活を願っているが、許可されたかは不明である。寛政期に地頭用向帯刀を「御断」した直接の理由は不明だが、町奉行所に地頭用向帯刀の公認を求める場合、帯刀を許可される人間が「当時公事出入諸懸り合」を抱えていないことが、手続における必須条件であった。⁽⁸⁰⁾近世後期の今里村は村方騒動のほか、近村と用水等をめぐる争論を恒常的に抱えており、この条件を満たせる状況にない。そのため今里村では、地頭用向帯刀が町奉行所の公認を得られなくなり、神事帯刀のみとなったと考えられる。神事帯刀と地頭用向帯刀の公認条件の違いが認められるといえよう。

神事帯刀は、享保六年以降、京都町奉行所への届出こそ必須となったが、その決定権は村が掌握し続けた。神事帯刀する人間を決めるのは、町奉行所でも、領主でもなく、村であった。神事帯刀は、支配側の選定に拠らぬ帯刀としての性格は、最後まで変わることがなかったのである。しかし寛政一〇年には、神事帯刀も町奉行所への申告が厳格に命じられた。これ以前の安永二年五月の願書でも、「尤銘々地頭江も此段相伺候処、何之差支無之旨」を了承されたと述べ「何卒神事之節斗、是迄之通、帯刀仕度奉願候」と、村は地頭の許可を得た上で、町奉行所にその公認を求める文面となっている。⁽⁸¹⁾帯刀が身分標識として、町奉行所による厳格な把握が目指されるようになったため、神事帯刀についても、支配側の「御免」が必要な、身分標識としての「帯刀」の一種だとする認識の変化が起こり、その意味での「帯刀」に同化していったのである。⁽⁸²⁾「名跡相続」「改性^(姓)」という建前が、その継承において

標榜されるようになったのも、帯刀に対する、かかる意識の変化のためであった。

第三章 帯刀の届け出と実態

(1) 久貝六兵衛の帯刀実態

百姓の帯刀は、町奉行への届出とその実態とに差異が存在する場合もあった。庄屋としての地頭用向帯刀を許された、久貝氏の事例から見ていきたい。

乙訓郡勝竜寺村泉涌寺領庄屋の久貝六兵衛は、寛政一〇年（一七九八）の「厳密」な帯刀改の最中、雑色松村三郎左衛門からの三月一七日の通達（前出）を受けて、「御地頭泉涌寺御用之節、私先祖より代々帯刀仕、役義相勤申候、右之外帯刀不仕候」との返答書を提出した⁽⁴⁾。しかし彼は「代々」の地頭用向帯刀をこれまで全く町奉行所には申告していなかった。そのため四月六日、庄屋六兵衛（「久貝六兵衛」は地頭用向の時だけ名乗れる名前であるので、願書の差出人としては必ず「庄屋六兵衛」と名乗っている）と年寄清右衛門は、京都町奉行所宛の「乍恐口上書」において改めて届け出を行った。そこでは、久貝六兵衛の帯刀について①「延宝六年十月より庄屋役相勤候二付、地頭用之節斗り帯刀仕来候得共、御役所様御願申上哉、年古き義二而相分不申候」、②「尤継目品替之義ハ地頭表へ相届候義二而、御役所様江者御届不申上奉恐入候」と述べている。つまり①町奉行所に申告したかどうか不明、②代替りの手続も、これまで地頭泉涌寺には届け出てきたが、町奉行所には届け出ていなかったと認めて謝罪している。

この願いは許可されたようで、その後享和二年（一八〇二）四月の松村氏からの帯刀人調査の際、村庄屋権兵衛・村年寄太兵衛は、前回調査時から品替りがないと返答している。なおこの享和二年の調査では「先達而帯刀御調之節」に提出された「久貝六兵衛」について、①その住居する屋敷の敷地の領主は誰で、その敷地に蔵入地（幕

府領が含まれるか、②現在の生死、継目届出の年月日など、品替りの情報を申告するように求めている。勝竜寺村も泉涌寺領や蔵入地などからなる五給の村落であり、住居する屋敷地の領主と、百姓としての帰属領主とが異なる場合もあったから、⁸⁵ 帯刀許可における他支配との抵触有無が確認されたのである。⁸⁶ 右の庄屋・年寄は、久貝六兵衛は「泉涌寺領ニ住居」し、その屋敷地に蔵入地は含まれていないと返答している。⁸⁷

その後、享和三年九月、久貝六兵衛は、自分の家は旗本久貝忠右衛門（知行五五〇〇石）の名家であるとの「由緒」により、「御地頭様之御家来ニ被 仰付、常帯刀仕度」と泉涌寺に願ひ出た。旗本久貝氏との関係云々は、「家来」となり「常帯刀」を正当化するための付会的文言である。なお願書には、年寄清右衛門が「於村方何之差支等無御座候」との奥書もあり、村方承知の上であった。十二月二七日、家来としての常帯刀は許可され、六兵衛は村役人奥書の上で泉涌寺役人に請書も提出している。しかし村も久貝も泉涌寺も、これを町奉行所には届け出ている。⁸⁸ つまり久貝は、町奉行所の把握では、地頭用向帯刀の庄屋のままでが、地頭たる泉涌寺からは公式に「家来」として「常帯刀」することが認められ、村もこれを承知していた。彼の帯刀は、地頭と町奉行所とで、その認識が異なる状態になったのである。なお「家来」化は、士分への身分移動であるから、百姓身分からの離脱が必要条件となる。⁸⁹ 町奉行所へ届け出なかったのは、そのような変化や手続を嫌い、内々の形にとどめたものであろう。

(2)「継目」ながら「新規」

天保十一年（一八四〇）一月二一日、七一歳になっていた久貝六之進（六兵衛から改名）は、高齢を理由に庄屋役の退任を泉涌寺役人中に願ひ出て、その後役として忝八十之進が庄屋に任命された。これをうけ、二月一九日、八十之進は町奉行所へ帯刀人としての継目届（「乍恐口上書」）を提出した。「私父六兵衛事六之進義、泉涌寺領百姓ニ而、則右寺領ニ住居仕、代々庄屋役相勤罷在候ニ付、地頭用之節斗帯刀仕来候処、此度退身いたし、私義跡相

続仕、是迄之通、庄屋役相勤候二付、父六之進同様、地頭用之節斗、久貝八十之進与相名乗、帯刀可仕旨、右寺役人中より被申渡候二付、御受申上度」と伺い出たのである。この継目届の差出人は「城旁乙訓郡勝龍寺村 泉涌寺領庄屋八十之進」と「年寄清右衛門」となっており、当然「地頭用之節斗」でのみ使用される「久貝八十之進」という苗字付きの名前は、この書面でも差出名としては使用されない（できない）。なお享和三年に父六之進が、実際には泉涌寺から「家来」として「常帯刀」を許可されていたことには一切触れておらず、八十之進もその事情を理解した上で、町奉行所向けの態度をとっていることが分かる。

しかし町奉行所にこの書面を提出したところ、久貝六之進の帯刀は町奉行所の「御帳面」に見出せない、と告げられた。町奉行所の記録に不備があつたようである。困惑した八十之進は、泉涌寺や雑色松村三吾のもとに出向くなどして右往左往した末に、二六日、松村から、今回の帯刀届は「新規願」として行うように指示された。泉涌寺は八十之進に「先例」を申し立てることを勧めたが、八十之進は松村の意向に従うのが無難と考え、「新規願」で行うことを泉涌寺にも了承してもらつた。八十之進は後代の子孫にむけて、次のように記している。「後代之者共、継目・品替等之義者、前以松村氏へ参り、内談申上候歟、又者与力衆・同心衆歟、手筋有之候ハ、得与申込置候ハ、早速御調出来候間、若勝手二願出候ハ、大ニ六ヶ敷候間、後代之もの共、急度相心得可申候」。彼は願書手続きにおいて、雑色や与力・同心への内願・下調べを行わず、願書をいきなり持参している。「御帳面」の不備も下調べの段階で判明していたら、うまく「継目」の形で処理する道はいくらでもあつたのであろう。

かくして八十之進の帯刀は、全く「新規」のこととして手続きが行われることになった。まず二月二九日、①泉涌寺役人山本対馬は町奉行所に、「当寺領城州乙訓郡勝龍寺村百姓八十之進」について、「代々庄屋役相勤候処、此度当寺用向之節斗、久貝八十之進与相名乗、帯刀為致申度」という願書（「口上書」）を提出する。前代六之進のこれには一切触れず、庄屋八十之進に対し、全くの新規に「当寺用向之節斗」の苗字帯刀の格式を与えるという届け

表5 天保11年3月2日の「御礼廻り」

名前	金額	備考
石崎謙三郎様	金100疋	証文方与力
芝田誰(唯)四郎様	金3朱	証文方同心
松村三吾様	金100疋	上雑色
永田	銀2匁	下雑色
小嶋	銀2匁	下雑色
筆者 証次郎	金3朱	筆耕松屋庄次郎カ
山本対馬様	金100疋	泉涌寺役人

出典：「帯刀記録」（久貝章夫家文書）。名前は史料表記のママ

出となっている。更に②同日付で、勝竜寺村泉涌寺領の庄屋八十之進・年寄清左衛門から、この地頭用向帯刀を「御請」したいとの「乍恐口上書」が町奉行所へ提出された。その後、雑色から村に対して、同人に当時公事出入り無いか、帯刀人となつても村に差支えがないか問い合わせがあり、③勝竜寺村の村庄屋嘉兵衛・年寄九郎右衛門は、八十之進にその問題がない旨を記した証文（「就御尋口上書」）を松村に提出する。そして三月二日には、庄屋八十之進・年寄清右衛門・泉涌寺役人山本対馬の三名が連名で、この願いが聞き届けられたことへの④「御請書」を町奉行所に提出し、手続きが完了した。なおこの日、八十之進は「御礼廻り」として関係者に都合金一両二朱と銀四匁の謝礼を支払った（表5）。

久貝八十之進の帯刀は、実際には前代からの継続である。しかしその手続き上は、右の事情からやむなく「新規」として処理されたものである。その出願の書面の内容は、事実とは異なっているが、八十之進は「継目」継承という手続に拘泥せず、帯刀許可という結果を優先して「新規」の手続きを進めるという、現実的選択で済ませたのである。

久貝氏の場合、寛政一〇年に初めて地頭用向帯刀が町奉行所に届け出られたが、それ以前から地頭許可のもとで帯刀しており、後に地頭の許可で、内々には「家来」として「常帯刀」となったが、町奉行所向けには地頭用向帯刀のままとし、八十之進の継目願もそれを踏まえた上で行っていた。更に前代からの継続であるのに、「新規」願いの形で願ひ出るなど、書面上からうかがえる帯刀事情と、その実態とが相当異なっていた。このような事例を踏まえると、町奉行所に神事帯刀だけと届け出るようになった今里村の帯刀人にしても、実際は地頭の許可だけで、旧来通りの地頭用向帯刀を継続していた可能性もあろう。

おわりに

近世京都近郊における百姓身分の非常帯刀は、元禄五年令では町奉行所への申告なしで認められたが、享保六年以降、町奉行所への申告が必須となった。しかし現実には品替り・代替りの申告が厳格に行われず、寛政一〇年に「厳密」な帯刀人の調査が行われるまで、町奉行所に把握されていない百姓の非常帯刀が相当数存在した。寛政一〇年の帯刀人改が「厳密」であったのは、町奉行所がこれらの悉皆調査・把握を企図したからであった。

地頭用向帯刀は地頭が許可するものだが、神事帯刀は村の裁量によつて認められていた。古くは旧家と庄屋とは一体であるがゆえに、この二つの帯刀理由を備える百姓も多かったが、地頭用向帯刀は支配側による行政上の秩序、神事帯刀は、村内部の秩序に基づく村の習俗であり、本来後者は治者の身分標識としての帯刀ではない。近世百姓の帯刀は、この由来の異なる二つの非常帯刀が、混交しながら存在していたのである。しかし神事帯刀も、次第に身分標識としての帯刀認識と、その管理の中に吞み込まれて同化し、支配側の公認が必要なものへと変化した。故に町奉行所への手続上、「名跡相統」・「改性^姓」という、事実に反する建前を以て、その正当な継承を表明せねばならなくなったのである。しかし具体的に誰が神事帯刀するかは、あくまで村が決定権を持ったまま存続した。それは近世社会における帯刀の意義を再考する必要性をも示しているよう。また地頭用向帯刀にしても、町奉行所の把握と、地頭が認めている実態とが異なる状況も存在していた。それは領主支配と町奉行支配の在り方にも関係するが、今後の課題としたい。

註

(1) 近世における「帯刀」とは、刀・脇差、すなわち大小二本を帯びることのみを意味する。

(2) 朝尾直弘「近世京都の牢人」(『朝尾直弘著作集 第七巻』〈岩波書店、二〇〇四年〉、初出一九九二年)、同「十八世紀の社会変動と中間的身分層」(同上、初出一

九三年)、熊谷光子「帯刀人と畿内町奉行所支配」(塚田孝他編『身分的周縁』(部落問題研究所、一九九四年)、吉田ゆり子『兵農分離と地域社会』(校倉書房、二〇〇〇年)第四章)。

- (3) 拙稿A「近世の帯刀と身分・職分」(『日本歴史』七九八号、二〇一四年)、同B「郷土帯刀」と「郷土株」(『地方史研究』三七八号、二〇一五年)、同C「近世帯刀風俗の展開」(『風俗史学』六一号、二〇一五年)、同D「明治初年における「平民帯刀」処分」(『日本歴史』八二六号、二〇一七年)、拙著『刀の明治維新』(吉川弘文館、二〇一八年)。

- (4) 拙稿E「近世禁裏御香水役人の実態」(『古文書研究』七五号、二〇一三年)、同F「近世地下官人「贅者」の実態と「町家兼帯」」(同上八二号、二〇一六年)。

- (5) 註2熊谷論文、吉田論文。私領主は史料上、領主・地頭の呼称の別があるが、京都近郊の公家や寺院などの領主は、通常百姓側から「御地頭様」と呼ばれている(後述のように「御本所様」などの称もある)。本稿では史料上の「地頭」「地頭御用向」などの用例に従って、公家・寺院領主の用向のみでの帯刀許可を地頭御用向帯刀と総称している。

- (6) 註3拙著、拙稿A・C。一般町人が神事で帯刀することとは天和三年令で禁じられ、後述の元禄五年の規定では、社人・神人ながら「平常ハ町人」である者のみ「社役」限定の帯刀が許された。これは「町人」として帯刀しているのではなく、あくまで社人・神人としての帯刀であ

る。「百姓」として帯刀する神事帯刀とは、似て非なるものである。

- (7) 拙著『近世京都近郊の村と百姓』(思文閣出版、二〇一四年)。

- (8) 四座雑色については、京都市編『京都の歴史 第四巻』(二九六九年)五六六～五六九頁、朝尾直弘「鉄棒曳き」(朝尾直弘著作集 第七巻『(岩波書店、二〇〇四年)、初出一九九五年)、『京都雑色記録 第三巻』(思文閣出版、二〇一二年) 解題等に詳しい。

- (9) 藤本久志『刀狩り』(岩波書店、二〇〇五年)、註3拙稿A・C、拙著三一～五二頁。寛文八年(一六六八)に一般町人が江戸府内での帯刀を禁じられたことも帯刀が身分標識化していく大きな契機となっており、天和三年令の前提であった。

- (10) 『和漢三才図会』(正徳五年(一七一五)頃刊)「刀」の項。

- (11) 『徳川禁令考 前集第五』(創文社、一九五九年)二八〇〇。高柳眞三・石井良助編『御触書寛保集成』(岩波書店、一九三四年)一三四三。

- (12) 前註『徳川禁令考 前集第五』二七九六。

- (13) 近世史料研究会編『正宝事録 第二巻』(日本学術振興会、一九六五年)一七八四。

- (14) 註3拙著九七～一〇三頁。

- (15) 『徳川禁令考 別巻』(創文社、一九六一年) 御定書上巻三五。

- (16) 『牧民金鑑 上巻』(刀江書院、一九六九年) 三四三

三四四頁、『公裁録』（地人書館、一九六三年）九七頁。

- (17) 『御触書天保集成 下』（岩波書店、一九四一年）五二七六。なお享和元年令については、拙稿「近世「唐人両名」考」（『歴史評論』七三二号、二〇一一年）も参照。

- (18) 『御仕置例類集 第一冊』（名著出版、一九七一年）六七七六～七七頁。

- (19) 私領主による苗字帯刀免許は許可された本人のみ、領分と旅行時に原則制限されている。そのため幕府は評定所・奉行所への出廷の際、私領主から帯刀人とされていても、その格式を認めず一般の百姓町人として取り扱うことを原則としたが（石井良助・服藤弘司編『三奉行問答』（創文社、一九九七年）一四四、同『時宜指令』（創文社、一九九八年）四九）、寛政十二年、評定所は評議の上、一定の取り扱いではなく、引き続き「時宜次第」で判断することを決している（『評定所張紙留 坤』（国立国会図書館所蔵）三百九番。註3拙著「一九九一～五二頁。

- (20) 大名の「用達」に任命され、苗字帯刀を領主より許可されている京都町人の例は、近世後期には一般的にみられる。例えば京都町人松屋加兵衛は、松平讃岐守用達としては諏訪加兵衛と名乗り、用達としての用向での帯刀許可が与えられ、町奉行所にも申告されていた（註4拙稿F）。

- (21) 元禄四年末の調査の経緯・理由は、註3拙稿A・拙著でも詳述した。ここでは百姓に焦点を絞る。

- (22) 京都町触研究会編『京都町触集成 別巻二』（岩波書

店、一九八九年）六九四。

- (23) 同右 六九七。

- (24) 同右 六九九。

- (25) 元禄四年二月「刀指申者御改ニ付一札之事」（石田政房家文書D1。以下、特に注記のない文書群は、すべて長岡京市教育委員会生涯学習課所蔵紙焼写真帳による閲覧。文書番号を記す）。

- (26) 京都市編『史料 京都の歴史 第三巻』（平凡社、一九九二年）四一四頁。

- (27) 『京都町触集成 第一巻』（岩波書店、一九八三年）四六。

- (28) 註3拙稿B。

- (29) 勿論、それは天和三年令による成果（註3拙稿A、拙著）の維持が目的ともいえる。

- (30) 壬生村郷土のように、村側によって、常帯刀が事実上規制されている場合もある（註3拙稿B）。

- (31) 『京都御役所向大概覚書 上巻』（清文堂、一九七三年）三六八～三七〇頁。

- (32) ハレの場での百姓の脇差について、幕府は近世を通じて問題なしとの認識であり続けた（註19『三奉行問答 問答集1』三一八、註3拙著）。

- (33) 元禄一三年正月「刀指申者御改ニ付一札之事」（石田政房家文書D3）。

- (34) 『京都町触集成 第一巻』一一九六。

- (35) 石田賢司家文書（『長岡京市の古文書』〈長岡京市教育委員会、一九九九年〉一〇一頁に写真所収）。

- (36) 『長岡京市史 本文編二』(一九九七年)二六三～二六六頁。一九九〇年頃における同村の「ヤシャゴ」については、『長岡京市史 民俗編』(一九九二年)一一五～一六、一三〇～一三三頁。
- (37) 享保六年一月「乍恐帯刀之儀ニ付以書付申上候」(京都市歴史資料館紙焼写真帳・城戸家文書)。
- (38) 宝暦元年二月「一札之事」(同右城戸家文書)。
- (39) 『史料 京都の歴史 第八巻』(平凡社、一九八五年)一八五～一八六頁。
- (40) 郷侍層と一般百姓層との対立がみられた村落で、「帯刀」が争点となったことは、山科郷士(吉岡拓『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇』(校倉書房、二〇一年)第八章)や、丹波の「岡苗」郷士(岡本幸雄『丹波国馬路郷士覚書』(海鳥社、二〇一四年))等の事例からもうかがえる。
- (41) 享保六年以降の同村の帯刀人については不明。
- (42) 享保六年「友俊家記」(佛教大学附属図書館所蔵「中原家文書」)一二月二日条。
- (43) 丑(享保六年)一二月一日「覚」(調子八郎家文書二五四)。
- (44) 『京都町触集成 第二巻』九七五。
- (45) 『京都町触集成 第三巻』九九三、一九六一、同四巻『一五五五、補八一二、同 第五巻』四〇二、同六巻『八三一、同 第八巻』一三八七。
- (46) 町では天明四年(『京都町触集成 第六巻』一〇四二)、寛政元年(同上 七巻『三九)、寛政二年(同上 八巻『六二)の三回に実行されたことは、町家兼帯の地下官人諏訪家の記録でも確認できる(「宦家命令記」(京都市歴史資料館紙焼写真帳・諏訪家文書))。
- (47) 註7拙著一四三頁。
- (48) 『京都町触集成』には見えないが、例年より厳格と認識された事例が、註2吉田著書一九八頁、註4吉岡著書三〇〇～三〇一頁でも触れられている。
- (49) 大島家「日記」(大島家文書)による。同史料については註7拙著参照。
- (50) 前註「日記」。
- (51) 日雇いの若党などは、一か月までは無届でよいが、二か月目に入ると届け出る規定になっていた(註31『京都御役所向大概覚書』三六八頁、『京都町触集成 第一巻』一九八)。
- (52) 寛政一〇年(天保一一年)「帯刀記録」(久貝章夫家文書二二二)。
- (53) 寛政一〇年三月二一日「乍恐口上書」(調子八郎家文書二二〇)。今里村については次章で詳述する。
- (54) 註2朝尾論文。
- (55) 『京都町触集成 第八巻』九四五。
- (56) 慶応四年閏四月、明治新政府下の京都裁判所による調査もある(註3拙稿D)。
- (57) 享和二年四月二六日「就御尋口上書」今里区有文書二四一六、註52「帯刀記録」。
- (58) 嘉永二年一〇月二六日「奉願口上書」(註37城戸家文書)。

- (59) 註49「日記」享和三年四月四日条、五月一二日条。
- (60) 註58「奉願口上書」、嘉永三年四月二五日「奉願口上書」(樋口哲也家文書六一・一二)、慶応三年二月二八日「奉願口上書」(高橋秋子家文書一・四)。
- (61) 京都市編『京都の歴史 第四卷』(平凡社、一九六九年)五六七頁。
- (62) 慶応四年四月、旧幕府領を直轄領とした明治新政府が、直轄領を対象に「帯刀人の調査を行っており(註3拙稿D)、例えば乙訓郡上植野村でも作成されたことが確認できる(慶応四年閏四月「帯刀人改帳」へ向日市上植野区有文書・整理番号七九)。
- (63) 寅(享保七年)二月「帯刀人所付」(小山寛治家文書へ以下小山と省略「一六一一」)。
- (64) 享保七年五月「帯刀人所付」(小山一六一一三)。
- (65) 元文二年閏一月三日「奉指上口上書」(小山一六一一)。(元文二年)閏一月三日「宇右衛門帯刀二付届書」(小山一六一一一)。
- (66) 宝暦元年「帯刀人所付等写」(小山一六一一五)。
- (67) 元文二年六月一〇日「刀帯御改二付奉差上口上書」(小山一六一一一)。
- (68) 安永二年五月二五日「乍恐奉願口上書」(小山六一一四)。
- (69) 安永二年五月二六日「乍恐口上書」(能勢久嗣家文書八一三一一)。
- (70) 安永二年五月「乍恐奉願口上書」(能勢久嗣家文書八一三一一)。
- (71) 註69。普明寺は村内の寺院で、同村の矢射講は同寺で開催されていた。一九九〇年代における同村のヤシヤグについては、註36『長岡京市史 民俗編』一〇八、一一〇頁、一二八、一三〇頁。
- (72) 安永二年五月二六日「乍恐口上書」(小山六一一四) 本文は註67の能勢家文書と同じ。
- (73) 巳(元文二年)六月一六日「帯刀人所付」(小山六一一六)。
- (74) 註7拙著。
- (75) 『長岡京市史 本文編二』一九一、一九五頁。
- (76) 寛政一〇年四月三日「乍恐口上書」(今里区有文書二四一一)。
- (77) 『長岡京市史 資料編三』二〇二、二〇四頁。
- (78) 享和二年四月二六日「就御尋口上書」(今里区有文書二四一六)。宛先は雑色松村三郎左衛門。
- (79) 嘉永三年四月二五日「奉願口上書」(樋口哲也家文書六一一一)。
- (80) 註2熊谷論文。註4拙稿E・F。第三章もその実例。註75・77。
- (81) 註70「乍恐奉願口上書」。
- (82) 身分標識化以前の「帯刀」風俗が、身分標識としての「帯刀」と同化させられていく傾向は、修験や神職などの宗教者も同様である(註3拙稿C)。
- (83) 以下は註52「帯刀記録」による。
- (84) 註7拙著。
- (85) 享和元年七月令(第一章)で、他領の者への帯刀許可

は禁止されていたことも関係していようか。同様の敷地についての調査は、同じ享和二年四月、今里村でも行われたことが確認できる（註78「就御尋口上書」）。

- (87) 享和三年五月一七日、松村は勝竜寺村庄屋年寄に対し、明一八日、久貝六兵衛を京都町奉行所に出頭せしめるよう召状を送っており、何か問題が生じたらしいが不詳。

- (88) 領主が百姓・町人を正式に「家来」にしても、これが町奉行所に届けられていない場合、幕府としては

「家来」になった事実を認めず、訴訟などで出廷する場合には、一般の百姓・町人として扱うことになっていた（『京都町奉行所科定類聚』（国立国会図書館所蔵）。同系統本の『武辺大秘録』にも同項目がある（『京都町触集成 別巻三』へ岩波書店、二〇一七年）一一〇頁）。

- (89) 註2 熊谷論文、拙稿「近世身分の移動・二重化と「人別」の取り扱い」（『日本歴史』八三九号、二〇一八年）。